



Title	Bhāratendu Harishcandraについてのメモ
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1966, 16, p. 95-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80258
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Bhāratendu Harishcandra についてのメモ

古 賀 勝 郎

भारतेन्दु हरिश्चन्द्र

भारतेन्दु हरिश्चन्द्र उन्नीसवीं शती उत्तरार्द्ध के हिन्दी साहित्यकार के रूप में प्रख्यात हैं। पर उनका कार्यक्षेत्र केवल साहित्य जगत में ही सीमित नहीं था। वे तत्कालीन भारत की विभिन्न समस्याएँ, भारतीय संस्कृति, हिन्दू धर्म इत्यादि प्रसंगों पर भी अनेक लेख हमारे सामने छोड़ गये। उन लेखों का साहित्यिक कृतियों की अपेक्षा कम महत्त्व नहीं है।

यहाँ पर उनकी साहित्यिक कृतियों के अतिरिक्त अन्य अनेक सामग्रियों के आधार पर उनके विचार की पृष्ठभूमि पर प्रकाश डालने का प्रयास किया गया है।

I

Bhāratendu Harishcandra⁽¹⁾ は Gopālcandra (1833—60) の長男として, 1850年 Kāshī に生れた。Gopālcandra の曾祖父にあたる Amīcand⁽²⁾ は1756年頃ベンガルの Murshidābād からカルクッターへ移住し, イギリス東インド会社とベンガルの Nawāb (太守) Sirāj-ud-daulah との仲に立って働き, 後に両者の対立が生ずるに及んでは東インド会社側に味方した。1757年のプラッシーの戦闘においては東インド会社側に勝利をもたらす功績のあった豪商の一人でもあった。彼はいわゆる Gomāstahあるいは Banyan とイギリス人が命名していたものに含まれるが, それらの多くはそれ以後一つの階級 (The Commercial Middle class) をなして成長する。⁽³⁾ しかし彼の場合は若干事情が異った。

Bhāratendu Harishcandra はインド流に言えば Vaiṣya で Agarwāl⁽⁴⁾ ゴートラに属し商業に従事するカーストの出身である。上述の Amīcand の先祖も以前デリーのムガル朝に出入りした御用商人で, Shāh Jahān 皇帝の第二子の Shujā' がベンガルの Sūbahdār となって Rājmaḥal に赴いた際, それに従って移住し, 都が Murshidābād に移るとともにそこへ転じた, という。

さらに Amicand は当時カルカッターを中心に新しく活動を始めた東インド会社の英人との取引による利潤を求めてカルカッターへ移り住んだのであった。金融・銀行業を専業としたのでその先祖以来 Seth と称していた。Amicand は自己の利益を中心に、土侯と東インド会社との抗争に際しては会社側の勝利へ少なからず尽力した。しかしその協力への報酬の期待は完全に裏切られて失意のあまり1758年に発狂して死亡した、と伝えられる。このような事情のもとにその子 Fatahcand (1749—1810?) は1759年に Kāshī に移り、Seth Gokulcand Sāhū の一人娘と結婚し、その資産を受け継いだ。以後一族は Kāshī に定住することになった。その子 Harsacand (1802—44) は Vallabha 派の熱烈な信徒になったと伝えられる。Harsacand の子が先述の Gopālcandra で、家業のかたわら文芸への愛好深く、当時の Kāshī の文人の多くとの交友があった。自らもヒンディー語の詩作も行う詩人として ‘Giridharadāsa’ という雅号を名乗り、多額の費用を投じて書籍の蒐集を熱心にした、と伝えられる。このような父親ゆずりの資質・環境に恵まれたことが Bhāratendu に文学への道を歩ませた一因になったと考えられる。

この父親の人格は、Kāshī に女子教育の学校が開設されると、当時世間体の悪いこととされ大変な勇気の要ることであったにも拘らず娘を通学させたり、また子供達には英語を習わせるなど甚だ進取の気性に富んでいたようで時代を見透す力も備えていた。⁽⁶⁾それは Bhāratendu の積極的ではあるが自主的な西洋文物に対する態度との関連も考えさせるものであった。それと同時に、「特に地主層を中心とする回教徒上・中流階級と同じく、あるいはそれ以上にヒンドゥー地主層を英語教育から遠ざけることになった“体面の保持”意識にわずらわされなかったヒンドゥー実業家・商人等」⁽⁷⁾の一員であったがためのものとも考えて差支えなからう。

Bhāratendu は5才にして母と、10才にして父と死別した。父親は母親の死後再婚していた。弟及び義母と彼の仲は後述するような理由でよくなかったようである。幼少の頃より教育は始められたようであるが、父親の死後3年あまりというから13, 4才の頃まで、Kāshī の Queen’s College に通ったのが正規の学歴と言えるものである。それ以後は家にあっての独学あるいは個人教授を受けてサンスクリットや英語を学んだほか自由に読書し、各地の旅行あるいは多くの人との接触により見聞をひろめたものと思われる。サンスクリットの造詣はかなり深かったようである。英語は Pandit Nanda Kishor 及び Rājā Shiva Prasād から学んだが、若干の英文学作品・雑誌(インド学関係のもの)等を読んだ以外、近代西洋思潮に直接触れる機会は殆んどなかったと言っても過言ではなからう。このことは彼の西洋文化についての理解及びそれへの態度を決定する要因の一つであることはここに繰返し述べるまでもないことである。彼はその他に、ベンガル語、グジャラーティー語、マラーティー語その他相当数のインドの地方語にも通曉してい

たといわれるが、それが彼の知識の増加に如何ほど役立ったかは疑問である。ただ、ベンガル語についての知識はかなり確かなものであったことは、ベンガル語作品からの翻訳・翻案があることを見ても認めねばなるまい。彼はウルドゥー語も学びその作品も遺しているが、それはムガル朝末期からペルシャ語にかわり次第にその重要性を増し、彼の属した階級のヒンドゥーにも必要とされた素養の一つとして、また彼の巾広い言語に対する関心から出たものである。従って、そのことはウルドゥー語は主として回教徒をはじめとする一部インド人の言語であり、ヒンディーこそがウルドゥーに代って発展すべき重要な言語であるとの彼の考えとは矛盾しない。⁽⁸⁾これはまた、この70年代から回教徒とヒンドゥーとの対立（北中部インド）の一因となったヒンディーとウルドゥーとの公的地位をめぐる論争に先鞭をつけるものであった。⁽¹¹⁾

ともかく才能に恵まれながらも彼は教育としては以上に記した程度のものしか受けていない。その理由は父親の死による経済的な理由よりも、保護者の一人としての父を失ったために強まった彼の生来の奔放な性格にあったとされる。金銭に無頓着、物惜しみしない彼の性格は、弟をはじめとする家族や親類との不和の因となり、1870年には弟との間に遺産の分割という事態に至った。その際彼の取得分は家屋・土地・店舗・商店街の権益等であったが、先にも述べた営利行為に対する無関心、おうような性格あるいは慈善事業や社会奉仕への寄金更には彼が最も意を注いだ文学活動への出費などで晩年はかなり不如意な生活を送ったようである。

彼は20才にも満たぬ頃から雑誌の発行を手がけ、詩や戯曲を中心とする文学作品の発表、伸びやかな性格のしからしむところ若くして多くの知友を得、誠実な人格によって名を知られ、また多くの社会活動をした。一方ではカーシー、カーシュミール、グワーリヤル、ジョードプル、リーワーンの藩主達の知遇を得るとともに、1877年には時のインド総督リットン卿に拝謁し、後のエドワード七世の訪印の際には記念のメダルも受けている。他方、ベンガルの偉大な教育家・社会運動家 Īshvarachandra Vidyāsāgara や19世紀後半より20世紀にかけての熱烈な愛国者・政治家の Surendranāth Banarjī にも知遇を得ている。ヒンドゥー教復古思潮の一因ともなったともいわれる Theosophical Society の Colonel Olcott にも会っている。また1867年には、Chaukhambā School という学校（今日ではベナレス大学に属する College）を設立し、同年 Youngmen's Association を、翌年には Debating Club を、1870年には 'Kavitā Varddhinī Sabhā'（詩文発展会＝文学サロン）を、1873年には 'Penny Reading Club'（読書クラブ）を、1875年には 'Tadiya Samāj'（宗教的会合＝ヒンドゥー教のいずれかの宗派的な面を強調するのではなく、一般的に倫理面や牝牛の保護・肉食排斥・禁酒運動などをひろめようとするもの）を設立するなど多方面に亘って社会活動をした。それに当時敷設間もない鉄道を利用して東はベンガル、オリッサ

地方から西はラージャスターン、パンジャブ地方や北はヒマラヤ山麓方面にかけかなり広大な地域を旅行し見聞をひろめたようで、特にベンガル方面への旅行ではかなり得るところがあったと思われる。

彼は1885年の1月6日に恐らく結核が因で、34才数ヶ月の短い生涯を閉じた。

II

前述のように彼の父は自ら詩人でもあり、戯曲を書いたりするほどの文才を有し、その住居は文学サロンとしての役割も果していたようである。そのような影響も手伝い、彼は早くから父親を驚嘆せしめるほどの詩への才能を示したと言われるが、それはともかく、最初の詩として今日伝わっているものは、Victoria 英女王の夫君 Prince Albert (1819—61) の逝去を追悼した ‘Shri Albarta Varnana’ (1861年) である。彼の成育に際して及んだ種々の影響を見逃すことは出来ぬが天賦の才にも恵まれていたことは否めまい。彼は15才の折に家族と共にヒンドゥー教の聖地の一つ Jagannāth Purī へ旅しているが、その旅行でベンガル地方の文化各方面にイギリス支配のもたらした影響とその反応としての新気運に接する機会を得た。旅行後すなわち18才の頃から彼の文学活動も本格化して行った。1868年にはその歴史と内容の高級さの両面においてヒンディー文学では先駆的な雑誌 ‘Kavivacana sudhā’ を発刊している。これは最初月刊から始まり次に半月刊、更に週刊となったものであるが、その内容は単に文学作品に限らず、政治・社会・宗教等に関する報道・解説的文章から随筆・評論までも含むものであった。しかしその編集発行の仕事は後に人に譲った。代って1873年の10月に ‘Harishcandra Magazīn’ (後日 Harishcandra Candrikā と改称、～1881年) という月刊誌の発行を始めた。その内容も詩や戯曲をはじめ評論・歴史等にわたるものを含んでいた。これは1884年、彼によって ‘Navoditā Harishcandra’ の名のもとに復刊されたが翌年1月の彼の他界と共に終りを告げた。彼の啓蒙家的役割を物語るものとして、これも彼の発刊になる婦人のための雑誌 ‘Bālā-Bodhini’ (1874年から4年間) を挙げることが出来る。これら雑誌の刊行に際しては当初は政府がその雑誌の若干の部数を購入するというような形で援助もしていたらしいが、記事の内容が当局の怒りに触れたことや、反対派の中傷等のため後にはそれも断たれ、それに彼自身の不如意なども因となっていずれも永續しなかった。しかし、その原因は単にそれに限らず、もっと根本的な問題すなわち、教育の普及がなかったこと、また新聞・雑誌を買い求めることにすら困難を感じるほど恵まれぬ民衆と一部の篤志家にその読者を見出さねばならぬという時代やそれに至らしめたものに存したことは多言を弄せずとも理解

されよう。新聞にせよ雑誌にせよ三百部もの発行部数を有することは全く稀であったのである。⁽¹²⁾

これらの雑誌に主に筆をとったのは彼自身であったが、それらを介して数少ない同志を集め、後進の人々に多大の刺戟と影響を及ぼした。Bākr̥ṣṇa Bhaṭṭa (1844—1914), Pratāp Nārāyaṇa Mishra (1856—94), Badrinārāyaṇ Caudhrī Upādhyāy “premaghana” (1855—1922) 等の文学者達は彼と親交があった人々である。彼の先駆的な役割を説明するには不十分であるが、先に挙げた ‘Kavivacana Sudhā’ に対し、ヒンディー語（最初はベンガル語も併用）による最初の日刊紙 ‘Samācār Sudhāvarṣaṇa’ がカルカッターから発刊されたのが1854年であり、その間、新聞・雑誌において見るべきものは現われていなかったことが指摘されよう。もっとも19世紀前半はおろか後半におけるヒンディー語の新聞・雑誌等の発行は不振を極めた中であって、日刊紙を除き大部分は文学関係の週刊、半月刊、月刊誌であったにせよ、その先駆性とそれら彼の雑誌が⁽¹³⁾ 背負わされた役割が単に狭義の文学への奉仕でなかったことを見過してはなるまい。⁽¹⁴⁾ 勿論、これらの他に宗教運動、社会改革運動あるいは政治意識の昂揚と共に、それぞれの特定の目標を持った機関紙の類も現われたが、その出発はいずれも70年代の後半以降に属するものである。彼のヒンディー文学への功績として特筆すべきことは、韻文においてはともかく、⁽¹⁵⁾ 散文の分野において思想を適確に表現し得る格調ある言語を築き上げるに力のあったこと、内容の面では従来の定形化し様式化したものに代えてイギリスの支配が及ぼしたインド文化各方面における衝撃の中に人間を、社会を、国家の将来を見つめ考えることを始めた点にある。当然先駆者としての不利な条件のもとに生み出された成果についての評価には異論があろう。言語の面のみをとってみても、Mahāvīr Prasād Dvivedī (1868—1938) の献身的な努力とそれに協力した人々の理解を通じてようやく今日のそれにつながるものを創り出すことが出来たのである。しかしながら彼が文学を従来の狭隘な世界から解放しようとした視野の広さは認めねばなるまい。その多彩な才能は詩に、戯曲に、随筆に、評論にあるいは紀行文に新鮮な空気をもたらし、民衆に接近せしめる上で大いに力のあった点は高く評価されてよいだろう。

彼は未完のものも含め戯曲に数多のものを遺しているが、サンスクリット語、ベンガル語及び英語の作品の翻訳・翻案の他に、創作も十指を数える。⁽¹⁶⁾ 戯曲に特に深い関心を寄せていたことは演劇についてのサンスクリット古典の研究をはじめ、独創的な手法を示していることから明らかである。(‘Nāṭaka’ [1883]参照) もっとも英語作品への一辺倒を示したベンガル語のそれにも、また煩瑣なサンスクリット古典にもとらわれなかった立場は「中道的」ということになるが、⁽¹⁷⁾ 彼の立場を暗示するものとして興味深い。

しかし、彼は小説には手をそめていない。それらしきものを書こうとしていた (Ek kahānī

kuch āp bitī kuch jag bitī =未完, 1876年)と言われるが、この方面への関心はあまりなかったようである。彼の関心の一端は、‘Madālasopākhyāna’ の如きプラナーナからの讖案のあることをみても知られよう。もっとも Bankimcandra Cattoṭpadhyāya の小説 ‘Rāja Simha’ の讖訳を未完のまま遺していることを記しておこう。散文には他に、諷刺文学に数えられるもの、紀行文などもあるが、量的には、彼の尚古趣味とインドの歴史への関心を示すものが、敬虔なヒンドゥーとしての信仰の吐露と並び圧倒的に多い。前者には Vikramāditya, Shankarācārya, Rāmānuja, Jayadeva, Vallabhācārya, Akbar, Aurangzeb をはじめとしてマハーラーシュトラあるいはカーシュミールの歴史等についてのものもある。もっとも彼自身、専門家でも学者でもなかったのであるから、好事家的な内容・記述に終っているのは止むを得まい。後者についてはヒンドゥーの生活規定に関するもの、プラナーナの記述、祖父の代から特に信奉した Vallabha 派に関するもの等も相当数ある。もっとも彼の関心が上記のものに限られていたとするのは早計であって、ソクラテス、ナポレオン三世、ロシアのツァー (Alexander二世)、回教の始祖マホメットをはじめとする聖徒達についての伝記あるいはコーランの讖訳 (未完) などのあることも忘れてはなるまい。

詩については先述の如く言葉の面でも伝統的なものを用いていたこともあり、詩材も伝統的なものが圧倒的に多いが、同時に今日のインドを念頭に創られたものも若干存することを記しておく。⁽¹⁸⁾

III

一般に18世紀後半に始まった西洋人によるインド学の隆盛が19世紀のインド人知識層に自国の古代文化に関する新しい認識と誇りとを将来することになった、と言われる。それはキリスト教及びそれを土台にした異種文化への反撥もさることながら、攻撃的にして傲慢な外国勢力の支配下にあった民族が屈辱感の代償として求めていたものを与える上に力のあったことは疑いのないところである。またこの点については多くの先人が指摘してきたところである。ネヘルーの言によれば、それは「外国人による征服と支配とが生み出した挫折と屈辱の感覚を軽くしてくれるなものかを欲していた」「勃興しつつあった中産階級の文化的基盤」⁽¹⁹⁾の役割を果たしたことになる。しかし過去の栄光の探求は結果的には、インド民族主義の成長を促す一方ではそれを歪めるという不幸をも招いた。過去の栄光はインド住民共通の財産とはなり得なかったのである。それはさておき Bhāratendu も古代インド文化をさん然たる光輝に映え、世界に冠たるものであったとなす点においては人後におちない。

彼が如何ほどインドの過去に関心を抱き、誇るべきインドの姿を追求していたか、またそれを同胞に知らしめようと努めたかは、多くの歴史関係の記述を遺していることから知られよう。⁽²⁰⁾ 彼はサンスクリットやペルシア語等の文献をそれに用いているが、英語を介して西洋人によるインド研究（たとえば Max Müller, H.H. Wilson, Goldstücker, James Prinsep, James Tod）等の成果を参考にしていることから彼のインド歴史及び文化認識の経路が知られる。⁽²¹⁾

もっとも、古代こそが最良の時期であったとなす考えは、インドに限られたものでなく、またインドの場合、現在進行中の時期をカリユガ（すなわち汚穢の時期）となすヒンドゥー教のユガ観が幾分関連しているとも言えなくもなかるう。しかし後でも述べるように彼はインドの古代のみを理想像として追求したのではないことは見逃してならぬ重要な点である。

ところで彼の言うインドの過去の栄光とは次のように表現される。

「ヴィヤーサ、ヴァールミーキ、カーリダーサ、パーニニ、シャーキャシンハ、バーナバッタ等の名のみにてもインドは全世界に誇るに足る国であるが、今日のこの窮状はなんたることか。 Chandragupta 王やアショーカ王の御代にははるかローマやロシアまでも御威光が及んだというが、この惨状は！ラーマやユディシュティラ、ナラ、ハリシュチャンドラ、ランティデーヴ、シヴァ等の高潔の士を生み出したインドがこの有様とは！」⁽²²⁾ 同じような感慨は古都 Ayodhyā の荒廃した様子を目にした時にも催し来るものであった。⁽²³⁾ それは一方では、かくも栄光を有していた、インドに果喰い今日見るが如き衰退をもたらした内部的な原因に反省の目を向けさせるとともに、他方では古都を壊滅せしめ、破壊されたヒンドゥー寺院の上に回教寺院を建立した異教の侵入者、回教徒へ厳しい目を向けさせることにもなった。⁽²⁴⁾ すなわち過去の栄光を代表するのは Rāma であり、Arjuna であり、マラーターの Shivājī であり、シークの Ranjīt Sinha であり、⁽²⁵⁾ Kāshī, Prayāga, Ayodhyā の聖地なのである。これらは彼の回教徒観のすべてではないし、後述するように回教徒、ジャイナ教徒を含めてのインド建設への意欲を見せてはいるが、インドの民族主義がヒンドゥーの側にあつては古代インド文化それもヒンドゥー教文化に向けられた点は事実として認めねばなるまい。

次に彼のインド文化についての反省の立場について見ようと思うが、それに先立って彼の思索の出発点についてはっきり見定めておく必要がある。彼は、インドという土地に住む人間としてヒンドゥーと同じく回教徒、キリスト教徒、拝火教徒を初めとする異教徒の平等な存在を認め、インドの発展を偏狭な宗派意識にとらわれた者としては望まなかった。しかしそのことは彼がヒンドゥーの一員としての立場から考えることを放棄することを意味しない。むしろヒンドゥーの立場から考えることが中心ですらある。従つてこの項でもヒンドゥー教についての彼の見解

が中心問題となることを予め断っておく。

手がかりとして彼が当時のヒンドゥー教をどのように考えていたかを見てみよう。‘Vaiṣṇavāṭa aur Bhāratavarṣa’⁽²⁶⁾において、ヴィシュヌ信仰がインドの信仰の代表たるべきことを強調しているが、それはさておき、ヒンドゥー教の名の下に温存せられている弊風がヒンドゥーの近代化の立遅れとなることを指摘して次のように述べている。

「ヒンドゥー教は今日のままで今後いつまでも存続すると考えるのは誤りである。今や我々の体力は衰え、外国風の教育により心性は変化し、生計をたててゆくには毎日15時間も18時間も汗水を流さねばならぬ。鉄道によって、カルカッターからラホールへ、ボンベイからシムラーへと東から西、南から北へと駆けまわらねばならぬし、役人、弁護士、技師の試験を受けるためにはイギリスへも赴かねばならぬ。そうせざるを得ないのである。それというのもキリスト教徒、回教徒、拝火教徒といった人達が高官になるというのに我々（＝ヒンドゥー）は日一日と落目になっているではないか。…イギリス人の食い残した職には回教徒をはじめとする異教徒がありつく。ヒンドゥーを名乗る者は…みな協力してアーリヤ族の団結を自己の至上義務となすべきである。そうしてこそダルマ（法）は護られるのだ」⁽²⁷⁾

ここではヒンドゥー教を語りながらも教義面を論ずるのではなく、彼の属した階層の利益あるいはコミューナルな利益を擁護しようとの現世的な動機が明らかに見られる。それと共に新しい環境に対するヒンドゥー教の順応性の必要を説き、そのあまりにも時代錯誤的な硬直面の存在を認めていることに注意すべきであろう。かつてはアーリヤ・サマージの Svāmī Dayānanda Sarasvatī にその偶像崇拜否定等の諸点を示して攻撃を加えているにも拘らず、次のように述べていることも忘れてはならぬ。

「ヴィシュヌ派、シヴ派、ブラーフマ・サマージ、アーリヤ・サマージというように〔ヒンドゥー教徒〕は一本一本の細紐と化しつつある。これでは発展という巨象を自らの手に繋ぎ止めておくことは出来ぬ。」⁽²⁸⁾これからも明らかなように、ヒンドゥー教は彼の考えにあっては内部の宗派や分派はなんら第一義性を有しない。ヒンドゥー教の分裂的・分派的傾向こそインドを衰退へ向かわせてきた原因と認めている。

‘Pākhaṇḍa-Viḍambana-Rūpaka’ (1872) において、あらゆる宗教に関する信仰の基本とも言うべきものを Bhakti（信愛）なる言葉で表明し、如何なる宗教あるいは宗派に対しても侮蔑の念のないこと、Bhakti なき信仰の偽善なることを述べているのは、ヒンドゥー教の形式主義的弊風を難じたものと考えられる。しかしそれは宗教の新らしい解釈というべきものではなく、ヒンドゥー教のいわゆる寛容性と呼ばれるものから発した感が強い。Rām Mohan Rāy の如き他

宗教の教義の深い探究の結果導き出されたものでも、Rāmakṛṣṇa Paramahansa の如き実践的求道に裏づけられたものでもなかった。

形骸化したヒンドゥー教に対する彼の攻撃は19世紀のヒンドゥー教改革運動家のだれにも劣らぬほどの痛烈なものであるが、それだけに「真の」と彼の表現するヒンドゥー教の優越性を誇示することも忘れてはいない。それではインドの発展の基本となる「真の」ものとはなにか。彼はそれをダルマ (Dharma) であるとなす。それは神の足下にひれ伏して捧げる祈りであるべきだが、現今のインドでは社会的規則とも言うべきもの、すなわち ‘Samāj Dharma’ が「真の」Dharma の名のもとに通用している。この ‘Samāj Dharma’ なるものは本来時間と空間とに依り修正・改変されるべきものである。彼はその例として、宗教的祭礼に伴う市、戒行、海外渡航、⁽³⁰⁾ 幼児婚、寡婦の再婚等を数えている。ここにはたとえ少なくとも硬直化したヒンドゥー教を新らしい立場で考えようとの意気込みも感じられる。しかしながら彼の思索を 18、9 世紀の西欧近代思想家達の影響下に見ることは不適當である。それは彼の受けた教育や成長の過程を考えた場合当然のことで、先述したような西洋人のインド学の労作に彼が深い関心を抱いていたこととは別問題である。従って彼を Henry Vivian Derozio(1809—1831)に導かれた Hindu College の学生達と同列に扱うのは無謀である。この点に彼の限界があり、逆に大衆への距離の近さもあるわけである。

‘Īshū Kṛṣṇa aur Īsha Kṛṣṇa’ 「イエス・キリストとクリシュナ神」(1879)においては、彼はインドの文明の古さ及び偉大さを示さんがために甚だ強引な語原学を披瀝している。それはともかくインド文化の優越性が極度に、不正確なまでも強調されている点に注意すべきだろう。⁽³¹⁾そこには示されている対象こそ違え、目指す方向はアーリヤ・サマージのそれと同種のものが働いていることを否めない。もっとも、ヒンドゥー教の解釈については Dayānanda のそれとは異なるものがある。彼の言う Dharma は従来通りの神の解釈であり、礼拝であり、聖典あるいは教義の新らしい解釈ではなかった。彼の理解するヒンドゥー教は、本来「シヴ派、シャクティ派、ヴィシュヌ派等の諸派にわかれず、数多のカーストや上下貴賤の差別なく、飲食についての厳格な規定による人心の分離もなく、幼児婚、寡婦の再婚や海外渡航の禁もなく、数多の神や幽鬼を拝することなかった」と Dayānanda の解釈と大差ないようであるが、プラーナ聖典そのものの信憑性を問題にするのでも聖典そのものの否定でもない。⁽³²⁾

また「もう一度よく目を見開いてそれらを見つめてみよう。賢明なる聖仙達はなぜそれら(規定)をつくり給うたのかを考え、その中から時と場所に応じたものを採用すべきである」⁽³³⁾との言葉は一見柔軟性に富む自由な思索のように思われる。しかしそれらは宗教経典・法典に規定され

ているが（真義が忘却され誤解されている）故に、たとえ今日反社会的なものと考えられていることでも実行に移されねばならぬので、⁽³⁴⁾バラモン教権から解放された場所での思索と解してはなるまい。いずれにしても彼は聖典の信憑性を論ずるにしても非常に穩健な態度をとったのであり、Rāmmohan Rāy の立場により近いものであった⁽³⁵⁾と言えようが、理性には徹していない。

彼のこのような態度にはその家庭での宗教生活が深く関連しているものと思われる。数多の詩歌をクリシュナ神への祈りへ捧げ、散文 ‘Yugala Sarvasva’ (1876) や戯曲にも ‘Pakṣaṇḍa Vidāmbana’ (1876) などのあることを見ても窺われるところである。この Vallabha 派的性格は、彼の解釈によると排他的なものではない。そこにはあらゆる宗教の出発点への復歸あるいはあらゆる宗教の中に存する共通点を強調しようとの考えも一部みられる。⁽³⁸⁾

また、‘Shrī Shankarācārya’ の記述では、彼には神話・伝説すら事実と峻別されていないようであって、いわゆるプラナーナのヒンドゥー教、伝統的な習俗一切を全面的に肯定しようとしたベンガル地方の復古主義的傾向（特に Shashadhar Tārakachūrāmaṇi あるいは Kṛṣṇa Prasanna Sen 等に代表されるもの）に似たものを感じさせる。

彼は幾度か厭世的な考え、無常観、超俗世界への憧れを表明すると共に、⁽³⁹⁾ヒンドゥー教の現世否定的な態度をも批判しており、⁽⁴⁰⁾インドの産業の発展を熱望していたことも知られる。矛盾と見える二面ではあるが前者を踏まえての後者への努力こそ敬虔なヒンドゥーとしての彼の念願であったと考えられる。そしてまた、これは単に彼一人に限られた傾向ではない。

IV

‘Vaidikī himsā himsā na bhavati’ (1873) において、彼は飲酒・肉食をするヒンドゥーを厳しく非難している。ヒンドゥーわけてもヴィシュヌ信仰に篤い彼のそのような態度は、至極当然のことかも知れぬ。しかし問題は、英語を識ることとそのような欧化傾向とを結びつけたものであるかのように言っていることである。⁽⁴¹⁾インドの陋習に批判の目を向け、幼児婚に反対し、女子教育に意を注ぐような進取的な一面と共に、英語を学ぶことすなわち西歐式教育の結果が飲酒・肉食につながるものと見誤る浅薄な判断力を持っていたと考えるべきではなかろう。飲酒・肉食・男女の自由な交際・洋装等に代表される当時の欧化風潮については彼は ‘Pāncven Cūsā Paigambar’ においても鋭く揶揄している。彼の活躍した時代に「自ら西歐式の教育を受け、西洋文化について学んだ人々によって欧化風潮への反対が強く叫ばれた」⁽⁴²⁾こともあり、当時の一部青年の間に欧化風潮に心酔した者のあったことも事実である。しかし彼の言おうとしたのは単なる

西洋模倣ではなく、インドの土地に西洋文化の美点を取り入れ、育み実らせることであって、西
欧式教育を無視しようとしたのではない。それは次の言葉からも知られよう。「女子には母国と
家風を尊び、夫を敬い、子供を自ら訓育するような教育を授けるべきである。…しかしそれは今
日行われているような方法であってはならぬ。今日のものは害あって益なしだ。⁽⁴³⁾」同じく ‘Nila
Devī’ (1880) の序においても西洋での女性の社会的地位の高さ、教養の深さ、視野の広さには心
打たれながらも、インドの女性にはそのような欠陥を補うと同時に、女としての慎ましさを大切
にするよう期待している。⁽⁴⁴⁾ ‘Nila Devī’ が果してそのように描かれているか否かは別として、こ
れは西洋がインドの理想像として完全なものでないこと、インドの発展は西洋化ではなく自主の
精神に基く吸収と創造にあることを宣明し、形骸だけの西洋模倣を批判した自省の言葉として解
すべきであろう。

これはまた、極端な欧化思潮に反対のあまり「寡婦焚死」禁止の法制化に反対するに至った
‘Dharma Sabhā’ (1830年設立) の指導者 Rāja Radhakānta Deb が、一面では西欧式教育を支
持し、女子教育、医学教育に熱意を示し、Hindu College の後援者、School Book Society の
メンバーとして名を連ねていたことと併せ考えらるべきことでもある。それに The Derozians⁽⁴⁵⁾
の名をもって呼ばれる19世紀前半のベンガルの一部学生の西洋理解とヒンドゥー教批判が結局イ
ンドの土地に根を下し得なかったこととも関連しよう。

もう一つ重大な点は西洋文化との接触が植民地支配という関係で行われたことである。ベンガ
ルにおける英語教育は単に英支配の御都合、下級官吏養成の目的で始められたものでなく、インド
人の側からのかなり自発的・積極的態度と宣教師や一部英人篤志家の支援にあったとする見解は⁽⁴⁶⁾
正しいものであろうし、Bhāratendu の場合も攘夷的な西洋文化への反撥でないことは先に述べ
た通りである。しかし本格的な西洋文化の理解の努力を彼がどれだけなしたか、またそれが出来
る可能な条件がどれほど与えられていたかを考えてみなければならない。やはり結果的には一面
的なものに終わったことは否定出来ないが、それは彼ひとりの責に帰すことなく、インドの
置かれた立場とも関連することである。またヒンドゥー教の覚醒期であったこと、地理的に英支
配と西洋文化との接触がベンガル地方ほど直接的でなかったことなどが、Bhāratendu の場合
には影響を及ぼしていると考えられる。

いずれにしても英語教育を受けたインド人知識層の行動そのものがヒンドゥー大衆を西洋文化
に疑惑の念を抱かせるに至った一因になったことは認めねばなるまい。

彼がヒンドゥー教徒としての意識を強く持っていたことは随所に窺われるところであり、⁽⁴⁷⁾‘Lard Myo Sahib’ (1872) においては、Mayo インド総督の殺害者（回教徒）に絞首刑よりも酷な宗教的な苦痛を刑罰として与えるように説いているなど、回教徒への憎悪が感じられぬでもない。‘Nila Devi’ (1880) にはヒンドゥー女性の回教徒への報復が扱われており、その他にもインド衰退の因を回教徒の暴虐に求めたり、⁽⁴⁸⁾Aurangzeb 王を狂信的な回教徒として描いている。また‘Vijayinī-Vijaya Patākā yā Vaijayanti’ (1882) において彼がイギリスのエジプト出兵に際し非常な喜びを表明している理由は、それに参加したインド兵の勇敢な戦いぶりを古代インドの武勇の復活と考えたこともあったが、もう一つ大きな理由は、[インド栄光の破壊者]回教徒の国アラブ〔エジプト〕に加えられた痛撃にあったことは明白である。(同44—46, 54参照) またイギリス支配は回教徒に好意的であると判断していたことも‘Viṣasya Viṣam Auṣadham’ (1876) の一文より判明する。⁽⁴⁹⁾

ともかく彼を含め当時のヒンドゥー知識層がたとえ一部にせよ、自分の存在を常にヒンドゥーの集団と関連づけて考えていたことが知られよう。もっとも、大衆の間にあってはそれほど強いコミューナルな意識は存しなかったであろうし、これは新興中産階級と密接な関係のあったことも事実である。しかし回教徒の側からどのような反駁がなされようとも、ヒンドゥーの目には（少なくとも北インドの）、「回教徒はヒンドゥーを見下げ、ヒンドゥーになじもうとしない人々」と映じたのである。それだけに Bhāratendu は「ヒンドゥーを兄弟と思い、ヒンドゥーの嫌悪する行為をせぬよう」望むと共に、回教徒の「新時代に即せぬ懐旧趣味、現実の逃避を過去の栄華に求める態度、刹那的・享樂的生活態度を改め、新しい時代の流れに應ずるよう」呼びかけている。⁽⁵⁰⁾特にここに描かれている回教徒は上中流の人々であり、回教徒全体の人口から見れば僅かの比率を占めるものに過ぎぬが、その後彼等が自己の利益の追求のため主導権を握って回教徒大衆を利用し、イギリスに乗ぜられるものだけに、この観察は事実として受取らねばならぬ。確かに大衆の間においては、両教徒には多くの共通点の存在していたことは否めないが、それでもなお、犠牲や不殺生についての考え、婚姻や食物などについての具体面にも差違の存したことも事実である。また上流ヒンドゥーの回教徒殊に下層カーストからの転宗者に対する蔑視なども数えられよう。このような背景を認識した上で Bhāratendu の回教及び回教徒観を正しく把握することが出来よう。

彼は上記のように回教徒を批判しながらも彼等の中に見られる立派な資質をも率直に認め高く

評価していることを知らねばならぬ。カースト制度の弊、飲食に関する規定、海外渡航の禁などのヒンドゥーの欠点は回教徒にはみられぬものであるとして讃えている。回教の本質とその不純物とを区別しようとした点は正当に評価さるべきだろう。回教の五聖マホメット、アリー、ファーティマー、ハサン、フセインの伝記を述べた ‘Panca Pavitrātmā’ (1884) 及び未完ではあるがコーランのヒンディー訳を試みた ‘Hindī Qurān Sharīf’ を遺している。

彼を偏狭なヒンドゥー教至上主義者と考えるのは明らかに誤りである。インドの栄光を地にまみれさせた回教徒及びヒンドゥー教の裏切者 Jayacandra に飽くを知らぬかのように呪詛の言葉を浴びせているが、それはヒンドゥーの存在を無視した一方的な態度にのみ反撥しようとしたのであり、それを回教及び回教徒への憎悪と受取ってはなるまい。従って Mayo に関する先述の言及も、ヴィクトリア女王への忠誠心のあまり発せられたものであろう。

ともかく不愉快な過去の認識の上に立ってもなお同じ国土に住む民として共通の利益を追求し、団結の必要性を説いている点を見逃してはならぬ。それはたとえ一部であろうとも後のヒンディー文学者にも継承されている。⁽⁵¹⁾ Harishcandra にあっては敬虔なるヒンドゥーであることと回教徒とともにインドの将来を憂い前進への努力をなすことは当然のことであり悲願でもあり得たわけである。そのことと回教徒に対し卑屈な譲歩の態度を決してとらなかったことは別問題であり、後のいわゆるヒンドゥー愛国者と言われる Shraddhānanda あるいは Madan Mohan Mālavīya 等の一面についても言い得ることであろう。

VI

Bhāratendu Harishcandra がヴィクトリア女王をはじめイギリス皇室への忠誠の念を表明した作品は数多い。⁽⁵²⁾ ‘Mānasopāyana’ (1876) においては、Prince of Wales にヒンドゥーの窮状を訴え、その慈悲を賜るにしてもそれは自らの身分をわきまえたものでなければならぬ、との慎しみを忘れぬ。それは決して不遜な態度でなされてはならぬのである。しかしこれが彼のイギリス支配に対する見解のすべてであると考えるのは正確でなく、主としてイギリス王室への忠勤と見るべきであって、そうすることによって、彼が古代インドに存したとする民をわが子のように愛する王臣の関係を創り出せると考えたからに他ならぬ。このような王臣の関係、イギリス皇室に対する⁽⁵³⁾ 考えや期待は多分に伝統的なヒンドゥーの政治思想「Dharma の守護」に負っているようである。

彼もイギリスのインド統治に伴っている好ましくない面を認めるが、それはイギリス女王とは無関係なのであり、1858年11月の叛乱鎮圧後の宣言通りにインドの民を愛していると信じている。

官吏登用その他の面でのインド人と白人との差別待遇をはじめイギリスのインド統治の方法についての不満は抱いていたにも拘らず、宗教面・文化面の悪影響としてとらえられる面が強かった。

‘Bhārata Durdashā’ は先にも述べたようにインドの現実を擬人化した戯曲であるが、その中で今日のインドの困窮の生じ来った原因を、①ヒンドゥー諸王の内紛による弱体化、②Dharmaの衰退、③回教徒による悪政、その他を列挙している。またイギリス支配は一応の平和と秩序の回復をもたらしたが、インドの富の海外流出は尽きることを知らぬ⁽⁵⁴⁾、とも述べている。しかしそれはイギリスのインド支配を根本的に批判することにはならぬ。イギリスの善政の下に同胞を覚醒せしめ、イギリスの庇護下に社会改良を行わねばならぬ。官僚主義が批判されているが、それは(女王に対して) Disloyalty の名で現われていることに注意すべきである。

いずれにせよ以上のように期待を寄せ、希望を托していたイギリス支配は夢のように現実には何物ももたらさぬことが次第に判明してくる。彼のこの認識に至る過程は甚だ緩慢であるが、当時の知識層の多くがそうであったように一つにはイギリス支配に身の保全を見出したこと、また先述の如く女王への信頼の念が強かったことによるものであったろう。しかしそれと同時に叛乱鎮圧に示され、いよいよ鞏固になってきたイギリス支配も彼に重苦しく迫りつゝあった。

イギリス支配の絶対的権力やその統治の不公平は ‘Angrez Stotra’(1874~8?)あるいは ‘Īshvara bara vilakṣaṇ hai’ に皮肉な口調で描き出されている。またイギリス統治を神の恩寵に比しながらも、国産品の愛用をすすめ、母語を英語に代えて使用するよう呼びかけざるを得なかった⁽⁵⁵⁾。バローダーの藩王をめぐる事件を取扱った戯曲 ‘Viśasya Viśam Auśadham’ (1876) でもイギリスの恣意や身勝手を婉曲に攻撃している。それは直言出来ぬ自分の身の上を嘆いているかのようである。勿論、彼の態度には滅び行く封建勢力への惜別の情がこめられていることを否定出来ぬだろうが、イギリス支配下に自分だけの安逸に耽ろうとする一部同胞の態度を暴露しようとした節が感じられぬでもない⁽⁵⁶⁾。

アフガン戦争の終結に際しては、戦争によりインドの富が失われ、人民の貧窮が増大する一方であったのが止み、苦痛が軽減される期待に喜んでいるのである⁽⁵⁷⁾。「回教徒の暴虐さに比すれば甚だ紳士的であるがインドの富を国外へ搬出する点では回教徒に比較にならぬほど不利益をもたらすイギリス支配」という言葉は、「セボイの叛乱を鎮圧した威力の前には眉すら動かすことの出来ぬインドの民」と映じた彼にしてみれば、発し得る最大の抵抗の言葉であったといえよう⁽⁵⁸⁾。

また彼が次の時代を動かす力を民衆の中に求めようとしている積極さは、Pratāp Nārāyaṇ Mishra⁽⁵⁹⁾ などと同様高く評価されるべきである。そして「民衆協会」を結成し、衣料製造の機械

を輸入し、国産の衣服を着用し、皆が協力して学問に励み、産業を興す⁽⁶⁰⁾」という地味ながら着実な将来への抱負は、「インドの富の流出を防ぐためには、富を創出する基礎になる知識の得られぬインドに正しい翻訳を得るためにも、一般大衆の理解出来る言語の発展を通じて学術・工芸の発展が期待される⁽⁶¹⁾」ために母語は大切であるとの信念と共に忘れ去られてはならぬ大切な点である。

VII

以上の記述からも明らかなように彼の存在を特徴づけるものは、その作品に横溢する愛国の精神である。勿論彼に伝統的な詩情などの描写の傾向をなしとはせぬし、イギリスのインド統治についても穏健な対英協調主義に終っていることは事実であるが、従来の詩人と異って彼はひとり安逸の城に閉じこもることなく進んでインドの、時代の重荷を背負ったことは否めない。彼が文学の分野で如何なる成果をおさめ、如何なる地位を占めるかについては疑問もあろうし、改めて論じらるべきであるが、少なくとも文学と人生とを密着せしめようとした彼の先駆者的努力は偉大と言わねばなるまい。

またこの期のヒンディー文学者の多くのように彼の生涯は民衆への奉仕の精神に貫かれる。煽動家への道は容易であるが、彼はそれを選ばなかった。英語教育の名で呼ばれる高等教育を受けた一員ではない彼は、経済的にも恵まれず、社会的にも認められることの殆んどなかった人々を文学活動や社会活動を通じて友となし、共にインドの現実を憂い、未来への道を探索した。その人々は無知にして極貧にあえぐ大衆ではないが、それに近い距離にあった人々である。当時高等教育を受けた人でヒンディー語及びそれによる教育や文学の発展に好意を寄せた人々がどれだけいたろうか。その役割の大きさは大いに強調されて然るべきである。

いずれにしても民衆への距離が非常に近かったという意味で、B.C. Upādhyāy ‘Premaghana’, B.K. Bhaṭṭa, P.N. Mishra 等と共に、民衆のための解説者・指導者として及ぼした影響を無視することは出来ない。これらの人々に理解された「インド文化」「西洋文化」「イギリス支配」等を介して、ヒンディー語地域の民衆は思索し反応する糸口を与えられたのであった。それだけに良きにつけ悪きにつけ彼等の役割は大きな意味をもつものであった。

註

- (1) 彼の伝記については Brajratnadās, ‘Bhāratendu Harishcandra’, Ilāhābād, 1962及びLaksmī Sāgar Vārsney, ‘Bhāratendu Harishcsndra’, Ilāhābād, 1956が参考になる。その他彼の作品中にも(‘utt-arārdha Bhaktamālā’, ‘Nātaka’, ‘Madhu Mukula’等)若干言及されている。
- (2) Brajratnadās によると正しくは Amīncand であるという。イギリス側の記録によると Omichand とある。Brajratnadās 前掲書 p.18
- (3) B.B. Mishra, The Indian Middle classes, London, 1961, p. 78
- (4) ゴートラとは父系血縁集団で外婚単位となるもの。
- (5) Brajratnadās 前掲書p. 50—61
- (6) ‘Bhāratendu Granthāvalī’, Kāshī, 2007 Vi., Vol I. p.753. 以下単に Vol I. II. III. と引用するのは ‘Bhāratendu Granthāvalī’ で, II及びIIIは同じく Kāshī, 2010 Vi.である。
- (7) Ram Gopal, Indian Muslims, Bombay, 1959, p. 35
- (8) Maulvi Tāj Ali より学んだとされる。(Brajratnadās 前掲書p.64) ‘Qānūn Tājirāt Shauhar’ (1883) などがある。
- (9) 彼の父もサンスクリット, ヒンディー, ウルドゥーに巧みであったという。
- (10) ‘Urdū kā Syāpā’ (1874), ‘Sphuta Kavitaen’ (vol II p.867)
- (11) Rājā shiva Prasād は1868年に ‘Memorandum Court Characher in the Upper Provinces of India’ を提出している。Shitikant Mishra, Kharī Bolī Āndolan’, Kāshī, 2013 Vi., p.815—6
- (12) Laksmī Sāgar Vārsney, ‘Ādhunik Hindi Sāhitya’, Ilāhābād, 1954, p. 145—149
- (13) 同上 p. 143
- (14) 彼の発刊した雑誌に続いて, 上記の Bhatta の Hindi Pradip (1877), “Premaghana” の ‘Ānanda Kādambini’ (1881), Mishra の ‘Brāhmaṇa’ (1883), 等があったが, いずれも内容については市広い視野を示していた。
- (15) 彼は韻文においては若干のものを除き伝統的な言語と韻律, 題材によっており, また Bhakti を唱ったものも多い。
- (16) サンスクリット作品の翻訳, 翻案には未完のものもあるが Jayadeva の ‘Gita Govinda’, Rājashe-khara の ‘Karpūra-Manjarī’, Vishākhadatta の ‘Mudrā Rāksasa’, Kañcana の ‘Dhanañjaya Vijaya’, Ārya Ksemeshvara の ‘Candakaushika’ に拠るといわれる ‘Satya Harishcandra’ 等がある。なお英語からは, Shakespeare の ‘The Mercant of Venice’ の 翻案 ‘Durlabha Bandhu’ がある。
- (17) Rāmcandra Shukla, ‘Hindi Sāhitya kā Itihās’, (2015 Vi.) p.423
- (18) たとえば ‘Bhārata Bhiksā’ (1875), ‘Vijaya Vallarī’ (1881)など。
- (19) 辻, 他訳「インドの発見」p.476
- (20) Vol III参照。
- (21) Vol III p. 66, 216, 783—802 など。
- (22) ‘Bhārata Durdashā’ Vol I. p. 495
- (23) ‘Sarayū pār kī yātrā’ Vol III p.954
- (24) ‘Prabodhini’, Vol II p. 679—685
- (25) Vol I p.485, 492, など。
- (26) Vol III p. 795, 797
- (27) Vol III p. 801—2
- (28) ‘Dūsanamālikā’ (1870)
- (29) Vol III p. 801
- (30) ‘Bhāratavarṣa ki Unnati kaise ho Saktī hai’ (1877)Vol III p. 895—903

- 31) Vol III p. 783
 32) Vol I p. 475
 33) Vol III p. 901
 34) 同 上
 35) R.C Majumdar, 'Glimpses of Bengal in 19 th Century', Calcutta, 1960, p. 53
 36) たとえば 'Devi Chadma Lilā', 'Tanmaya Lilā' (1873), 'Prema-Mādhuri' (1875), 'Prema Tar-
 anga', 'Venū-gīti', 'Prātaḥ Smaraṇa Stotra' (1877) など。またヒンドゥー教の戒行を唱った
 'Māgha-Vidhi', 'Kārtika-Karma-Vidhi' などもある。
 37) 'Tadiya Sarvasva' (1876), 'Bhakti Sūtra Vaijayanti' (1874), 'Prema Sarovara' (1874) にもみら
 れる。
 38) 同趣のものは 'Phūloṃ kā Guccā' (1881) にも見られ、スーフィー的な用語を用いたり、ヒンドゥ
 ー教、回教、キリスト教の垣根を越えたところに真理を見出そうとしている。'Jaina Kutūhala'
 (1873)にもそのような傾向が見られる。
 39) たとえば 'Vinaya- Prema-Pacāsā' (1881) の40など。
 40) Vol I p.475
 41) Vol I p.82
 42) N.S. Bose, 'The Indian Awakening and Bengal', Calcutta, 1960, p.169
 43) VolIII p.901
 44) Vol I p.519
 45) N.S. Bose 前掲書 p.36
 46) R.C.Majumdar 前掲書 p.23
 47) 「…ヒンドゥーは、回教徒からみてもイギリス人から見ても間抜けているということだ…」 VolIII.
 p.860, 'Musalmān Rājatva kā Samkṣipt Itihās' (1884)など。
 48) 'Prabodhini'(1874), 'Mānasopāyana' (1876)
 49) Vol I .p.360, 'Ripānāstaka' (1884) (2) も参照のこと。
 50) Vol IIIp.895—903
 51) たとえば "Premaghana" の 'Bhāratīy Prajā mem do Dal' (1906~7?)の後段, P.N. Mishra の
 'Ālam-e-Tasvīr' (1888) などにおいて。
 52) Victoria 女王の夫君 Prince Albert への 追悼歌 'Svargavāsī shrī Albarta Varnana Antarlāpikā'
 (1861), Duke of Edinborough の訪印に際して 'Shrī Rāj Kumāra Susvāgata Patra' (1869), 同じ
 く結婚を賀して 'Mumha-dikhāvani' (1874), Prince of Walesの訪印に際して 'Shrī Rājakumāra-
 Shubhāgamana-Varnana' (1875) など。
 53) Lord Mayo への追悼 'Lārd Myo' や Ripon 総督 (1880--84) を伝説上の Shivi, Harishcandra,
 Yudhisthira 等に譬えたりするところに見られる。'Ripānāstaka' (1884)
 54) 「かくしてわがインドの富は幾百千の道を経て、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカへと流れ行
 く」 VolIII p.902
 55) VolIII p. 903
 56) Vol I p.367
 57) 'Vijaya Ballari' (24)~(29)
 58) 'Vijayini Vijaya Patākā Vaijayanti' (86)
 59) Vol IIIp.898—9, P.N. Mishra 'Grāmom ke sāth hamārā Kartavya' (1891)
 60) Vol I p. 488—9
 61) 'Hindī kī Unnati par vyākhyā' (1877)